愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 17 号
2016.5
69-86p

東三河の淡輪系円筒埴輪
―豊川市石堂野Ｂ遺跡出土円筒埴輪の再検討―

早野浩二

豊川市石堂野Ｂ遺跡の古墳時代の遺構と遺物を再検討し、TK47 型式期から MT15 型式期、５世紀末葉から６世紀初頭の径 12m の円墳（または方 11m の方墳）に淡輪系円筒埴輪が用いられていることを明らかにした。併せて近在する船山古墳に石堂野Ｂ遺跡と類似する淡輪系埴輪が採用されていたことを示し、同一の生産窯から埴輪が供給されていたことをも推測した。また、小古墳に淡輪系埴輪が採用される状況と須恵器系埴輪の供給関係についても一定の見通しを示した。

1. はじめに

石堂野Ｂ遺跡は、豊川市御津町広石に所在する「集落跡」で、音羽川右岸の舌状台地上に立地する。同一の台地上には、古墳時代前期初頭、飛鳥・奈良時代、戦国・近世の遺跡である石堂野遺跡が立地する。同広石船山に所在する船山古墳は、全長約 37 mの前方後円墳で、南東約 0.7km の平野部西端に分布する。なお、古墳時代中期後半、全長約 95 mの前方後円墳である船山１号墳は北東約 2.0km、古墳時代後期前半の円筒埴輪と形象埴輪の出土が知られる赤根天王山古墳は南西約 1.2km、横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期の穴観音古墳は北西約 0.4km に分布する。対岸の音羽川左岸の白鳥台地上は古代三河国の中枢で、国府と国分二寺が設置され、関連する遺跡も多い（図１・２）。

遺跡は県道大塚国府線建設に伴い、愛知県埋蔵文化財センターによって、平成 11・12 年度に計 6,600 ㎡の発掘調査が実施され、平成 15 年度には発掘調査報告書が刊行された（愛知県埋蔵文化財センター 2003）。発掘調査においては、古墳時代前期初頭の竪穴建物と「方形周溝墓」等、「古墳時代後期」の「溝状遺構」、平安時代の溝状遺構と土坑等、中・近世の掘立柱建物と土坑墓・火葬墓等が検出されている。

「古墳時代後期」とされる「溝状遺構」から出土した円筒埴輪についてもすでに報告されてはいるが、出土遺物を再点検した結果、出土した円筒埴輪が淡輪系円筒埴輪であること等、追加すべき幾つかの知見を確認した。東三河地域における埴輪は決して多くはなく、発掘調査による出土はさらに少ない。そこで以下においては、石堂野Ｂ遺跡出土円筒埴輪が当地域における古墳時代遺構・遺物の基礎資料として重要な位置を占めるとの認識に拠りながら、改めてその詳細を報告し、より積極的な評価を試みる。

2. 円筒埴輪の出土状況

円筒埴輪の多くは「古墳時代後期」とされる 00B 区の「溝状遺構」SD805・SX816 において出土している（図３・４）。両遺構は重複し、「(SD805 が) SX816 を切っている」とされる（一方で、出土した円筒埴輪は SX816 出土の円筒埴輪が「SD805 の埴輪片と比較して、やや新しい様相を呈する」ともされる）が、両遺構の重複部分を跨いで同一個体の円筒埴輪がほぼ同じ高さで多数散在すること（図４上・写真）、いずれも「埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする」ことに加えて、遺構が重複する部分の土層断面の記録も残されていないことから、両遺構を別遺構とする積極的な根拠は乏しく、以下においては SD805・SX816 として扱うこととする。その「溝状遺構」は、「調査地点も含めた舌状台地上は、当該期の墓域であった可能性は充分考えられ」、「近距離に古墳の存在が想起さ

れる」ものの、「浅く幅も狭いことから脆弱な規模を呈し、墓域と直接結びつけるにはやや無理があり」、「古墳に直接関連する遺構とは断定できない」として、報告書では「溝状遺構」が古墳の周溝であることの判断を避けている。

しかし、報告書に記述はないが、調査区南端の溝 SD807 が重複するグリッド（IVG1q）で 0.22kg・17 点、隣接するグリッド（IIIG20q）で 0.77kg・40 点の埴輪が出土していることから（図４左下）、弧状を呈する SD805･SX816 と、その円弧を延長した位置にある SD807 が同一の古墳に伴う周溝で、埴輪は径約 12 mに復原される円墳に伴っていたことを想定することはそれほど不自然ではないように思われる。ただ、遺構の削剥が著しいことから、墳形を円墳に確定することは難しく、（SD807 の走行がやや直線的であることを根拠として）方墳を想定する場合は、辺約 11 mに復原される。なお、円筒埴輪以外に（周辺からも）同時期の土師器・須恵器は全く出土していない。

一方、同じく 00B 区において検出された SD801・SX801 は、「出土遺物、規模、方向などから」、「古墳の周濠の可能性も考えられる」とされる「古墳時代後期」の「溝状遺構」で、土師器（既報告第 30 図 129、報文の 121 は誤記）と「５世紀後半」とされる須恵器（後述）が出土しているが、埴輪は SD805・SX816 から混入したと思われる小片が出土しているのみで（IIIG11t に 0.01kg・１点、IIIG15t に 0.02kg・１点）、埴輪は伴っていなかったと考えられる。弧状を呈する「溝状遺構」SD801・SX801 を古墳の周溝とすると、古墳は径 14.5 mの円墳に復原される。

さて、調査区周辺を明治時代前半の地籍図と照合した結果（図２）、相対的に規模が大きい SD801・SX801 は「林」としての区画にその痕跡を残している可能性があるが、小規模な SD805・SX816、SD807 は早くに削剥されたからか、地割にその痕跡は反映されていないようである。また、周辺に古墳の存在を示す明確な地割や字名は今のところ見出していない。

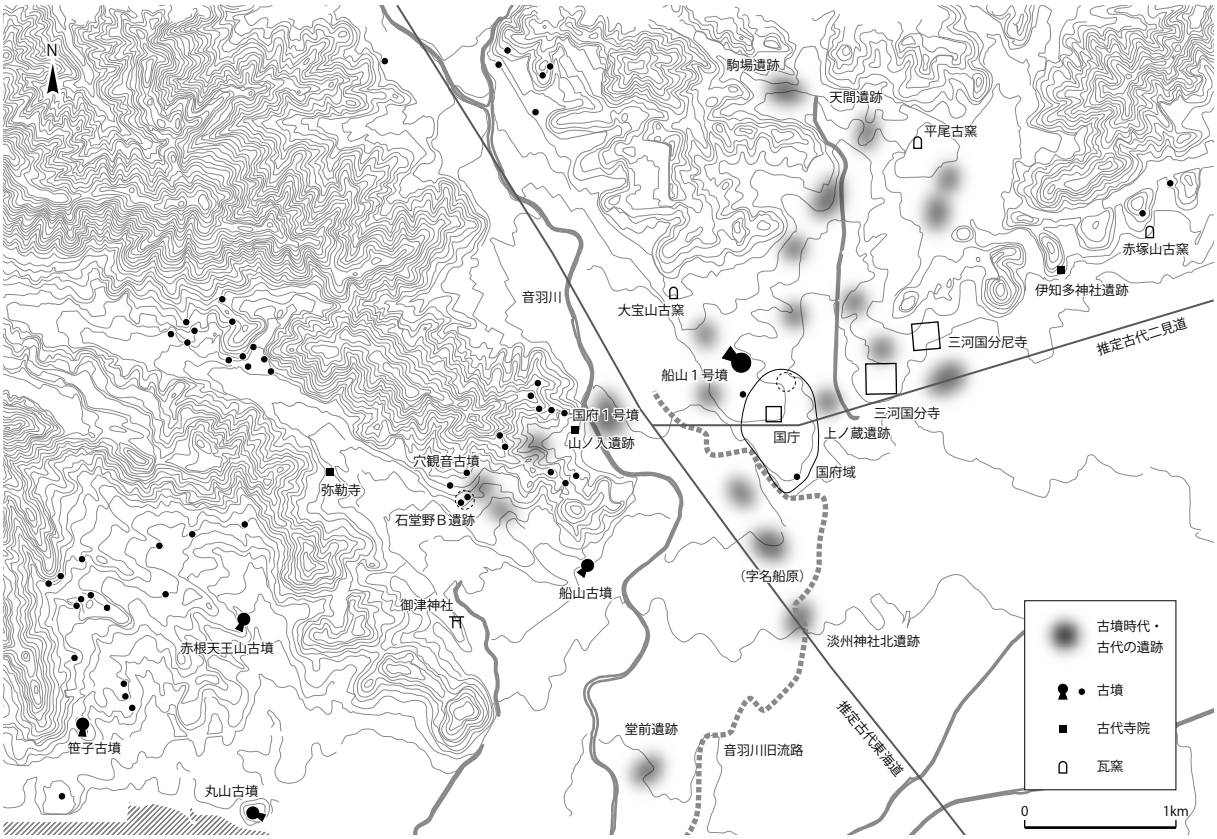


図１ 音羽川流域における古墳時代・古代の遺跡（1:50,000）

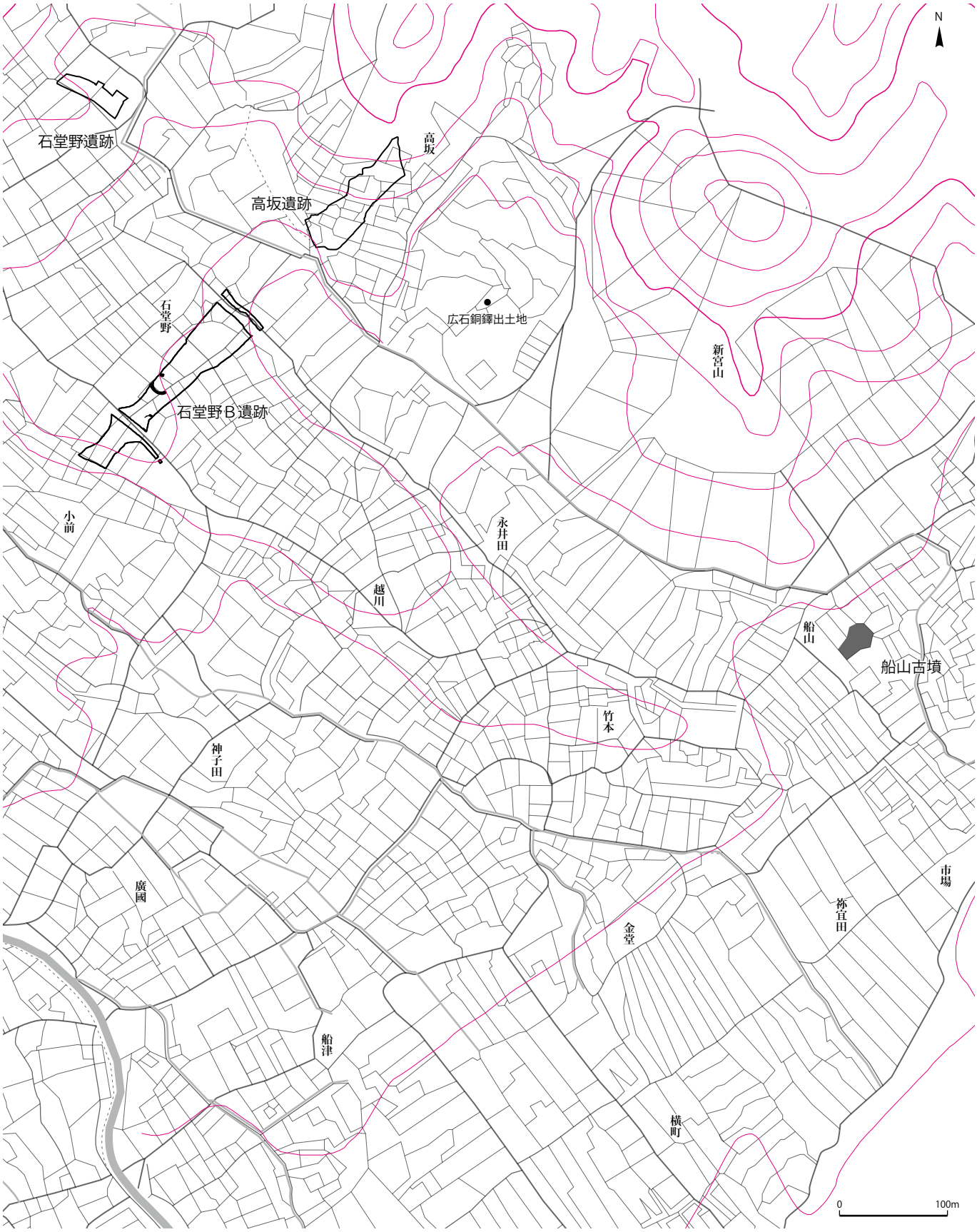


図２　石堂野Ｂ遺跡周辺地籍図（1:5,000）

3. 円筒埴輪

（1）概要

石堂野Ｂ遺跡 00 Ｂ区から出土した円筒埴輪として、５点が報告されているが（既報告第 31 図 134 ～ 138）、今回改めて抽出した 700 点以上、14.8kg の埴輪を精査し、30 点（図５～７- １～ 30・表１）を図示した。出土した埴輪はいずれも円筒埴輪（普通円筒埴輪と朝顔形埴輪）で、明確な形象埴輪は含まれないが、器種の特定が難しい破片が１点含まれる。なお、突帯間が残存する破片はない。既報告では円筒埴輪の底部の存在について全く触れられていないが、今回、抽出した 13 点の底部は、いずれも外面に段が認められることから、円筒埴輪は「淡輪技法」を用いて製作された淡輪系埴輪によって占められている可能性が高い。

円筒埴輪はいずれも無黒斑、窖窯焼成であるが、青灰色、硬質に還元焔焼成された破片は認められない。これらは主に焼成の程度から１類と２類に大別され、硬質で赤褐色を基調とする１類は 9.1kg（63.6％）、やや軟質で黄褐色を基調とする２類は 5.2kg（36.4％）で（小片 0.5kg を除く）、出土量としては前者が多い。なお、前者は相対的に器壁が厚く（1.3cm 前後）、

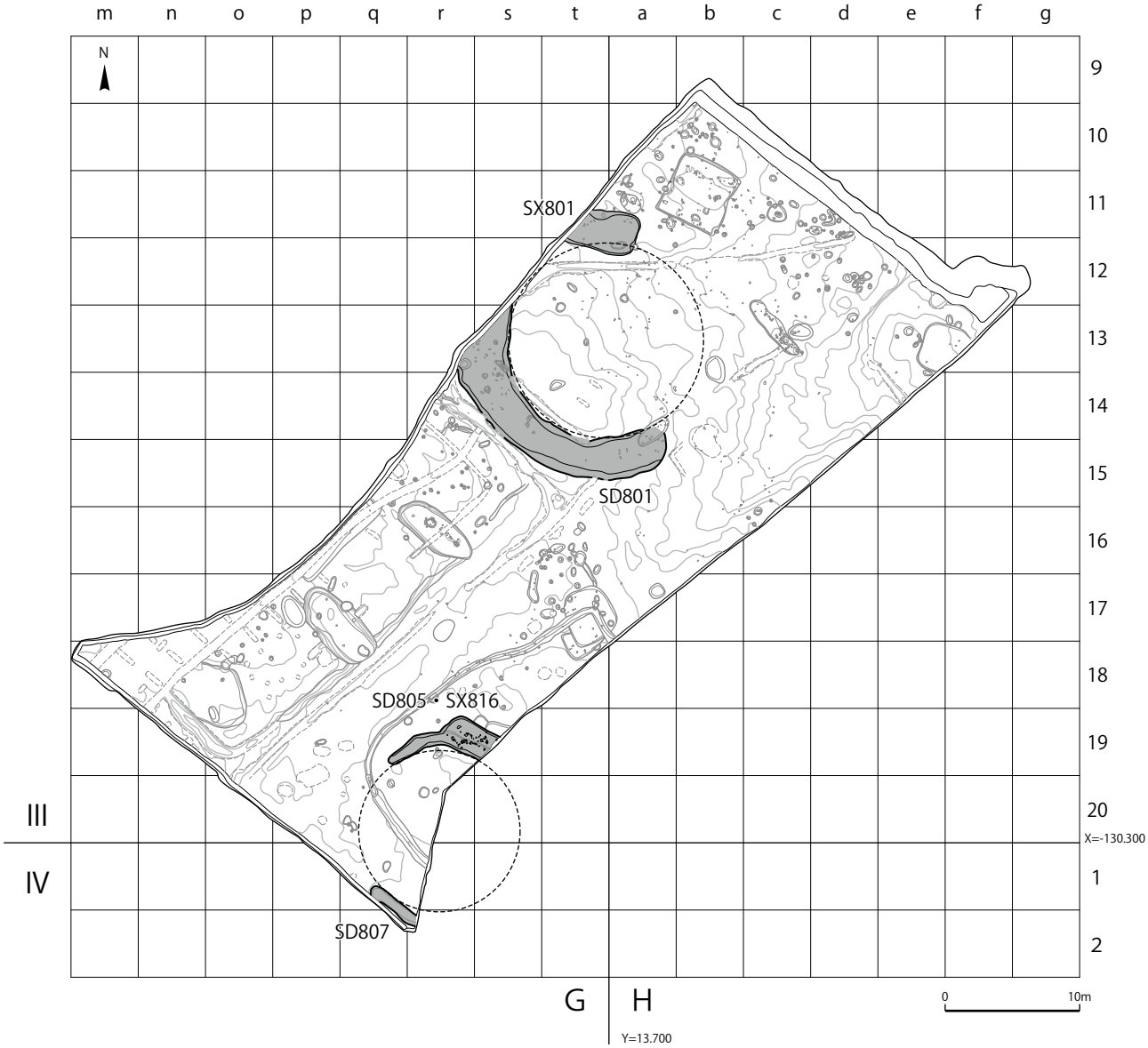


図３　石堂野Ｂ遺跡 00B 区遺構平面図（1:500）

積み上げ単位の幅が広い（４cm 前後）。後者は器壁が相対的に薄く（1.0cm 前後）、積み上げ単位の幅が狭い（2.5cm 前後）。

外面調整は１次調整としてタテハケを施し、２次調整として、いわゆるＣ種ヨコハケ（川西 1978）を施すが、ヨコハケが確認されない部位が目立つ（後述）。ハケは総じて粗く深い（相対的に１類はかなり粗い）。透孔は 16 点の破片に確認した。いずれも円形（またはやや不整な円形）の透孔と思われる。なお、器壁の外面に赤彩が残る部分がしばしば観察される。

朝顔形埴輪を除いて、突帯の上下の段にヨコハケが施された破片が認められないこと、同時期の淡輪系円筒埴輪の多くが２突帯３段の形態であることから（後述）、石堂野Ｂ遺跡出土円筒埴輪も２突帯３段に復原される可能性が高く、以下、各段については、第１段（底部）、第２段（突帯間）、第３段（口縁部）、突帯については、第１段突帯、第２段突帯と呼称する。

（２）１類朝顔形埴輪（図５- １～６）

１類の朝顔形埴輪として、口縁部（１～３）、頸部（４）、体部（５・６）を図示した。口縁部（１）、頸部（４）、体部（５・６）は同一個体の可能性が高く、頸部（４）の径は 17.4cm、体部（５・６）の径は 25cm 前後に復原される。径の復原が困難な口縁部（１・２）は図上に展開した。突帯は高さ 0.4cm、突出比１：５程度の低平なもので、断面形は台形に近い。

１（既報告第 31 図 134）は端面を作出し、下端はわずかに垂下する。２は突帯が付される部位、３は突帯は付されないが、成形の単位に外面のハケの方向の変化、内面のヨコハケの有無が対応する。４（既報告第 31 図 135）・５は円形の透孔が認められ、同一個体の対向する位置に対応すると考えられる。透孔は径６cm 程度、上位の突帯から２cm 前後の間隔を空けた位置に復原して図示した。

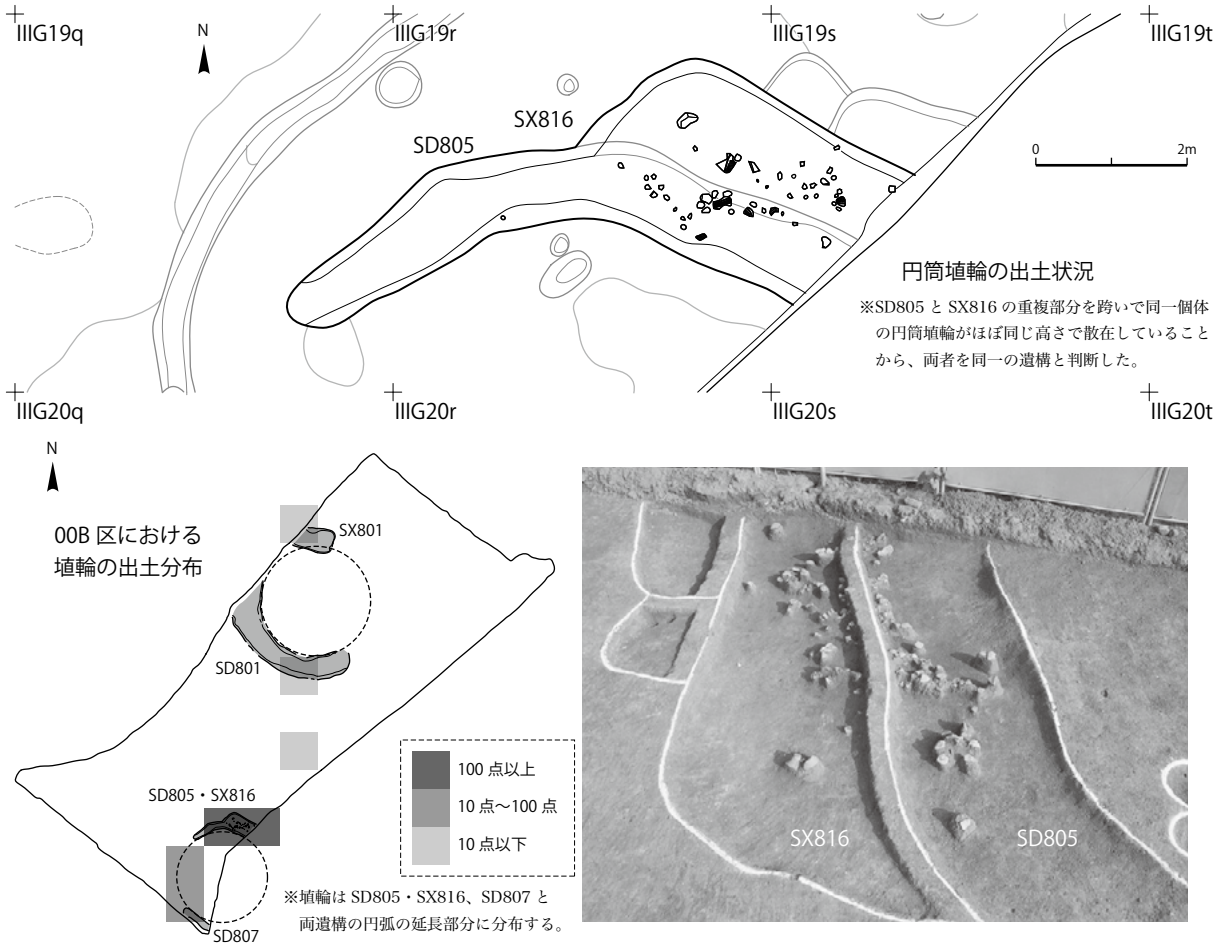


図４　円筒埴輪の出土状況（1:100）と出土分布

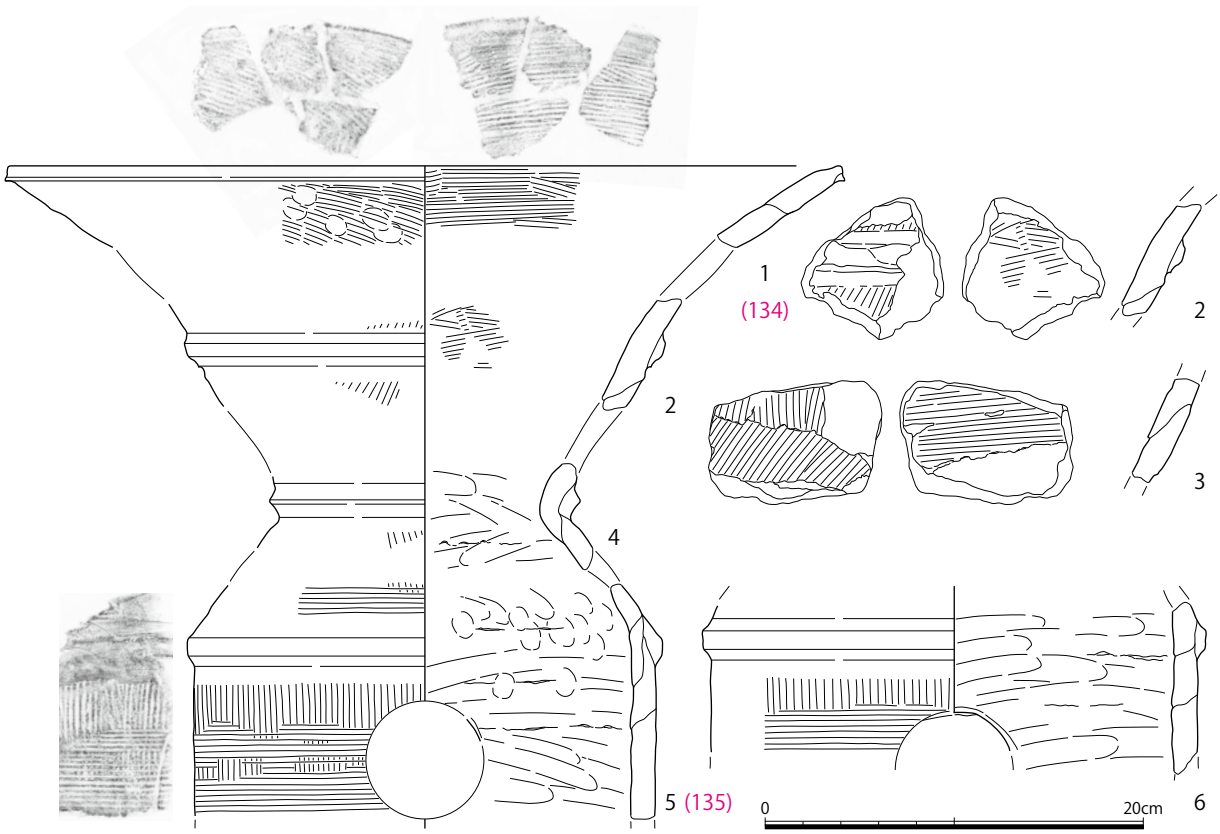
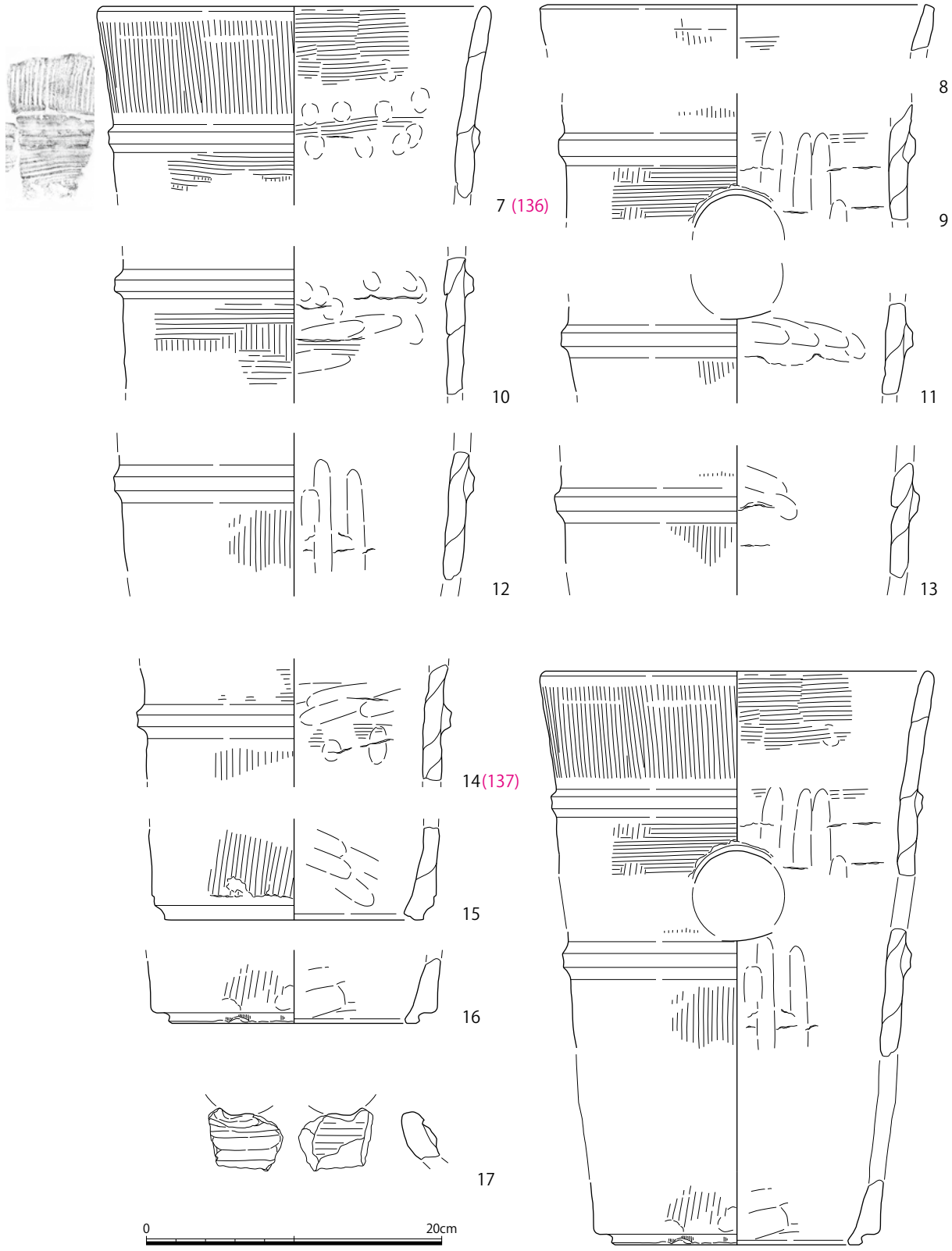


図５ 石堂野Ｂ遺跡出土１類朝顔形埴輪（1:4）

表１　石堂野Ｂ遺跡出土埴輪一覧表

番号	器種	分類	部位	グリッド	遺構	計測値	突帯計測値 高(cm)	幅(cm)	幅／高	既報告 登録番号	備考
1	朝顔形埴輪	１類	口縁部	IIIG19r	SX816/SD805（同一）	(径不明)				E-134	
2	朝顔形埴輪	１類	口縁部	IIIG19r	SD805	(径不明)					
3	朝顔形埴輪	１類	口縁部	IIIG19r	SX816	(径不明)					
4	朝顔形埴輪	１類	頸部	IIIG19r	SX816/SD805（同一）	(頸部径15.4cm)					
5	朝顔形埴輪	１類		IIIG19r	SD805	(体部径24.4cm)	2.8	0.4	0.14	E-135	赤彩？
6	朝顔形埴輪	１類		IIIG19r	SX816	(体部径25.6cm)	2.1	0.5	0.24		
7	円筒埴輪	１類	口縁部	IIIG19r	SX816/SD805（同一）	(口径26.6cm)	1.8	0.3	0.17	E-136	上下を修正し、図上で復原
8	円筒埴輪	１類	口縁部	IIIG19r	SD805	(径不明)					７と同一個体
9	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SX816	(体部径23.0cm)	2.2	0.4	0.18		赤彩
10	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SX816/SD805（接合）	(体部径23.0cm)	2.0	0.6	0.30		
11	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SX816	(体部径22.4cm)	2.4	0.5	0.21		
12	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SX816	(径不明)	2.5	0.4	0.16		
13	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SD805	(径不明)	2.3	0.4	0.17		赤彩
14	円筒埴輪	１類		IIIG19r	SD805	(体部径20.0cm)	2.2	0.6	0.27	E-137	接合を修正
15	円筒埴輪	１類	底部	IIIG19r	SX816	(底径19.2cm)					
16	円筒埴輪	１類	底部	IIIG19r	SX816	(底径19.4cm)					
17	器種不明	１類		VIG1q	BC中央トレンチ	(径不明)					朝顔形埴輪？
18	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SD805	(体部径21.2cm)	2.0	0.6	0.30		
19	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SD805	(径不明)					
20	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SD805	(径不明)					
21	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SX816/SD805（接合）	(体部径20.8cm)	2.7	0.5	0.19		
22	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SX816	(体部径20.6cm)	2.2	0.3	0.14		
23	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SX816/SD805（接合）	(体部径19.0cm)	2.7	0.4	0.15	E-138	
24	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SD805	(体部径19.4cm)	2.3	0.3	0.13		
25	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SX816	(径不明)	2.2	0.4	0.18		
26	円筒埴輪	２類		IIIG19r	SX816	(径不明)					植物質痕
27	円筒埴輪	２類	底部	IIIG19r	SD805	(底径18.4cm)					結束痕
28	円筒埴輪	２類	底部	IIIG19r	SX816	(径不明)					
29	円筒埴輪	２類	底部	IIIG19r	SX816	(径不明)					
30	円筒埴輪	２類	底部	IIIG19r	SX816	(底径18.0cm)					



（１類円筒埴輪を図上復原）

図６　石堂野Ｂ遺跡出土１類円筒埴輪（1:4）

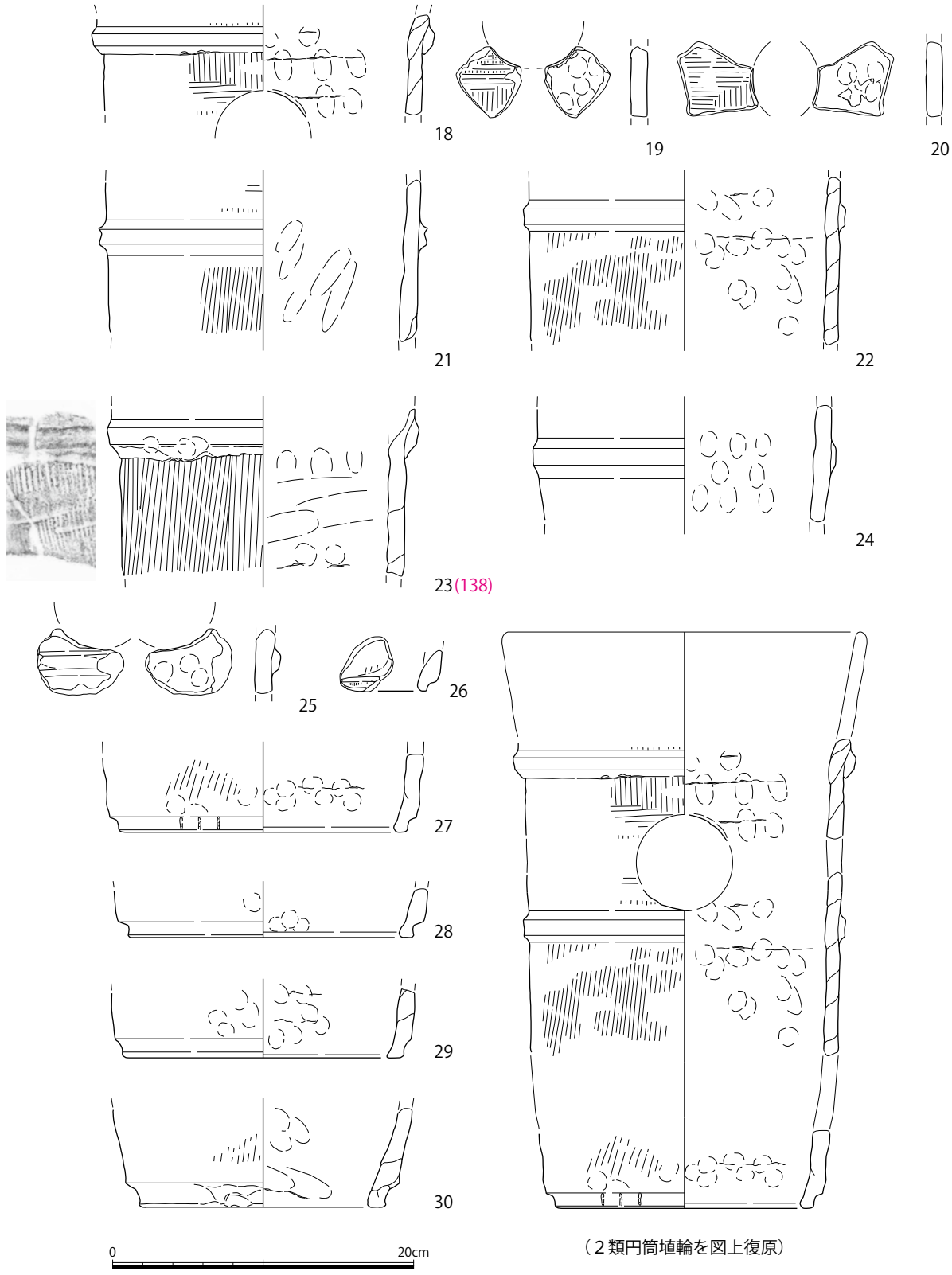
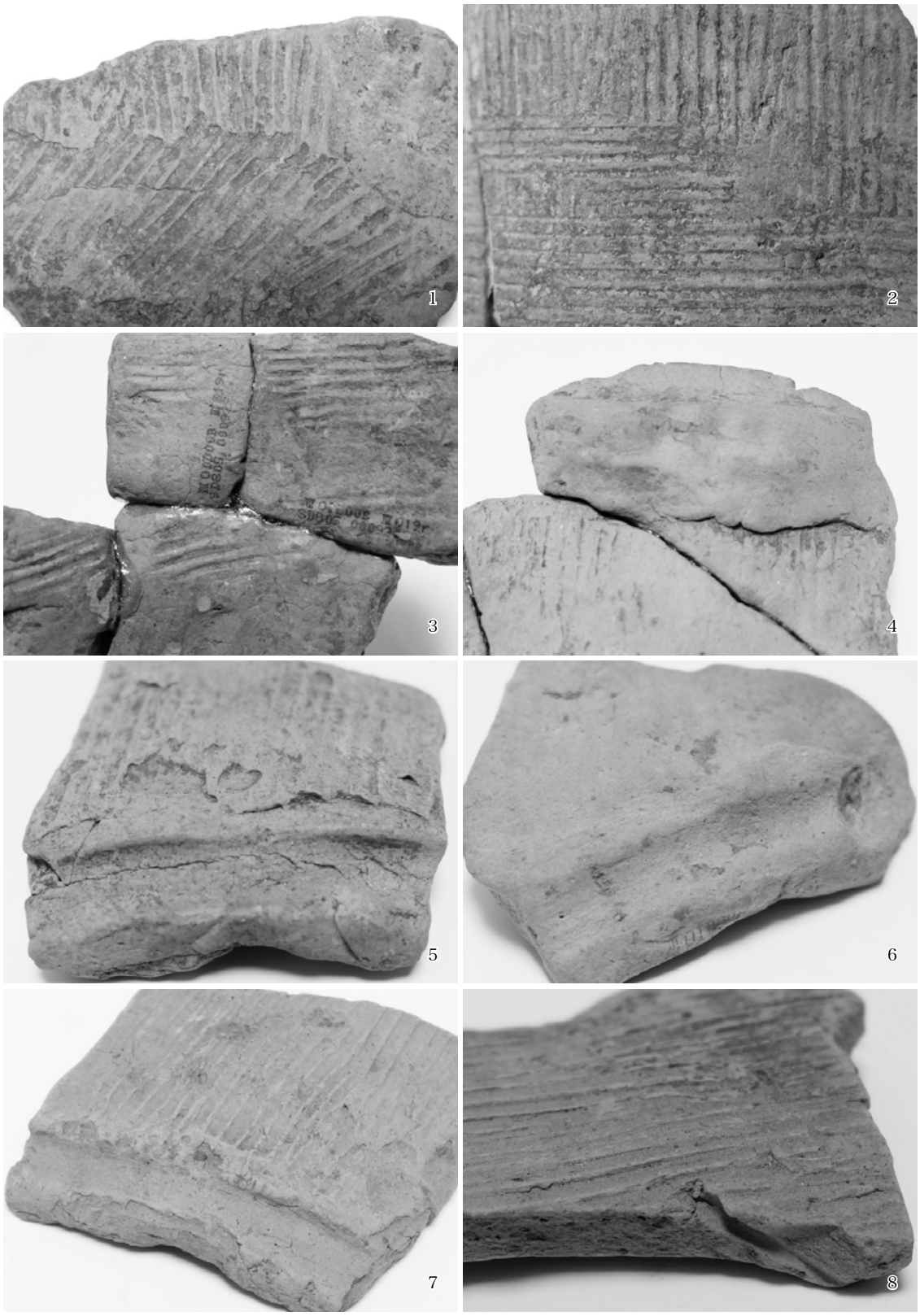


図７　石堂野Ｂ遺跡出土２類円筒埴輪（1:4）



1：石堂野Ｂ遺跡１類朝顔形埴輪（図５-３）の外面調整
2：石堂野Ｂ遺跡１類（図５-５）のタテハケとＣ種ヨコハケ
3：石堂野Ｂ遺跡１類の（図６-７）口縁部内面ヨコハケ
4：石堂野Ｂ遺跡２類（図７-23）の第１段突帯
5：石堂野Ｂ遺跡１類底部（図６-15）の淡輪技法
6：石堂野Ｂ遺跡２類底部（図７-27）の結束痕跡
7：船山古墳底部（図10-15）の淡輪技法
8：船山古墳石見型埴輪？（図10-23）の小穿孔

写真　石堂野Ｂ遺跡・船山古墳の埴輪の細部

（3）１類円筒埴輪（図６- ７～ 18）

１類の円筒埴輪として、口縁部（７・８）、体部（９～ 14）、底部（15・16）を図示した。これらは同一個体が多く含まれると思われる。

口縁部から突帯までは接合しないが、口縁部外面のヨコナデ範囲の位置関係を根拠に図上で接合し、口径 26.6cm、第３段の高さ 8.0cm に復原した（７）。体部（９～ 11）は径 22 ～ 23cm に復原される。また、朝顔形埴輪と同様、径６cm 程度に復原される円形の透孔が上位の突帯から２cm 前後の間隔を空けた位置に配され（９）、下位の突帯に接することを根拠に（11）、突帯間の幅を 8.5cm として推定復原した。底径は 19cm 程度に復原され（15・16）、２突帯３段の淡輪系埴輪の形態が、第１段が円筒のほぼ中央に設定される「２分割凸帯」となることから（赤塚 1992）、第１段の高さを 20cm 程度、器高 38cm 程度と推定した（図６の図上復原）。

突帯は高さ 0.4cm、突出比１：５程度の低平な断面「M」字形または台形のもの（７・９・11・12・13）、高さ 0.6cm、突出比１：４程度のやや高い断面「M」字形のもの（10・14）がある。

口縁部は同一個体の可能性が高い 22 点を抽出した。図上で接合した８（既報告第 31 図 136 を含む、上下を修正して図示）は、端面の作出が曖昧である。同一個体と思われる９は端面を作出することから、部位によって、端面の仕上げの程度には差があるようである。内面にはヨコハケが施される。口縁部、あるいは内面のヨコハケから第３段に相当すると判断されるいずれの破片においても、外面にはヨコハケがまったく観察されないことから、第３段は２次調整としてのＣ種ヨコハケが省略されている可能性が高いと思われる。

第１段も外面のヨコハケが省略されている可能性が高く、９・10 は透孔あるいは外面のヨコハケの有無から、第２段から第３段、11 ～ 14 は第１段から第２段に相当すると判断される。14（既報告第 31 図 137、接合の誤りを修正して図示）はタテハケがかなり粗く、条線は沈線状に近い。径も 20cm 前後で、やや細身の形態に復原されると思われる。

底部は５点（または７点）を抽出した。15・16 はいずれも外面にやや斜行する粗いタテハケを施す。16 は繊維質の圧痕が残る。

17 は朝顔形埴輪とも考えられるが、その場合、破片の傾きから壷部分に透孔がある朝顔形埴輪が想定されることになる。小片で判然としないことから器種不明とした。

（4）２類円筒埴輪（図７-19 ～ 30）

２類の円筒埴輪として、体部（18 ～ 25）、底部（26 ～ 30）を図示した。やはり、これらも同一個体が多く含まれると思われる。

体部（21 ～ 24）は径 20cm 前後で、１類と比較してやや細身の形態に復原される。１類と同様、円形の透孔と突帯の位置関係（18・25）から、突帯間の幅を 8.8cm として推定復原したが、透孔の下端付近に突帯がない破片（19）もある。底径は 18cm 前後に復原され（27・30）、突帯間の幅が１類と近似することも参考にして、第１段の高さを 20cm 近くに推定した復原図を図示した（図７の図上復原）。

突帯は高さ 0.3 ～ 0.4cm、突出比１：６程度の著しく低平なものが多く、１類を含めて焼成の程度との相関が看取される。18・23（既報告第 31 図 138）は突帯下端のヨコナデが省略される。特に 23 は省略が著しい。

18 ～ 20 は透孔から、18 が第２段から第３段、19・20 が第２段に相当すると判断される。１類と同様、第１段外面のヨコハケは省略されている可能性が高く、21 ～ 25 は第１段から第２段に相当すると判断される。

底部は８点を抽出した。27 は外面にやや斜行するタテハケを施す。26 は繊維質の圧痕、27 はそれを結束した痕跡が残る。

4. 系譜と編年上の位置

（1）淡輪系円筒埴輪の系譜と編年上の位置

三河地域の淡輪系埴輪は、淡輪系埴輪の主要な分布域の一つである遠江地域との関連において把握されることが多い。また、石堂野Ｂ遺跡の円筒埴輪に特徴的なかなり粗いハケは、赤塚次郎の分類（赤塚 1992）によるＨ類（「磐田型」）、鈴木敏則の分類（鈴木 1994・2003）による遠江Ｉ類の淡輪系埴輪を想起させることも、遠江地域との関連を示唆する。

ただし、石堂野Ｂ遺跡の円筒埴輪は、鈴木敏則による「淡輪系遠江型埴輪」の分類における第１段外面のヨコハケを完全に省略した遠江IIb類に対応するが、石堂野Ｂ遺跡の（１類）円筒埴輪は突帯間のみにヨコハケを施す可能性が高く、ハケ調整をほとんど欠く遠江IIc類とも異なる。なお、遠江IIb類はTK47型式期からMT15型式期、遠江IIc類はMT15型式期からTK10型式期に対応するとされる。他方、外面のヨコハケ省略の観点からは、鈴木による「淡輪系伊勢型埴輪」の分類における突帯間のみにヨコハケを施す伊勢IId類に類似する。なお、伊勢IId類は（第１段のヨコハケを省略したIIc類、ヨコハケが省略された伊勢IIe類とも共伴し）、TK47型式期からMT15型式期に対応するとされる。こうした（東三河地域の）状況については、赤塚が伊勢地域の淡輪系埴輪について、「ヨコ方向の主要な動作が早くに曖昧的となり一貫とした変遷をしめすことは見られない」、「いち早くタテハケ系・Ｂ種ヨコハケ系と製作法が錯綜し」、TK47型式期以降に「技法の混乱が認められる」とした理解（赤塚1992）が改めて参考となる。

以上から、円筒埴輪の系譜については、遠江と伊勢のいずれか一方に求めることは難しく、やや不安定な側面もあるが、編年上の位置としては、TK47型式期を上限として、MT15型式期を下限とする理解が妥当であろう*。

（２）SD801・SX801との前後関係

一方、SD801・SX801出土須恵器として、蓋杯（または有蓋高杯）の蓋（１）と杯（２）、瓶（３）、（有蓋壷の）蓋（４）、有蓋壷（５）、短頸壷（６）、鉢（７）がある（図８上）。

1（既報告第30図133の器形を修正）は口径13cm前後で、稜が強く突出する。３（既報告第30図132の文様を加筆修正）は頸部が著しく大きいが、口縁部は短小で長大化していない。これらの特徴は東山11号窯式（から東山10号窯式）あるいはTK47型式に対応する。

５（同一個体の既報告第30図130・131を図上で接合、文様を加筆修正）は砂粒を含まない胎土で、軟質に焼成される。特徴的な胎土の一致から、口縁部外面に波状文を施した６をそれに伴う蓋と判断した。有蓋壷の編年上の評価については、近隣のTK47型式期の水神古窯灰原（豊橋市教育委員会1998）、TK47型式期からMT15型式期の三ツ山古墳（豊橋市教育委員会2000）の例が参考となる（図８下）。

以上から、SD801・SX801の時期は、東山11号窯式期（から東山10号窯式期）あるいはTK47型式期に求められる可能性が高い。問題は須恵器を伴うが埴輪を伴わないSD801・SX801と、埴輪を伴うが須恵器を伴わないSD805・SX816、SD807の前後関係である。出土遺物の点においては、後者がやや先行するようにも捉えられるが、分布としては、前者がより高所に立地することから、前後関係を決することは難しい。いずれにせよ、両者は５世紀末葉から６世紀初頭の短期間に相前後して築造されたことは確かであろう。

5. 船山古墳（御津船山古墳）との関連

前段までにおいて、TK47型式期からMT15型式期、５世紀末葉から６世紀初頭に石堂野Ｂ遺跡の径約12mの小円墳（または辺約11mの小方墳）に淡輪系円筒埴輪が用いられていたことを明らかにした。同時に問題となるのが、「５世紀末から６世紀前半」（須川2005）とされる埴輪を有する近隣の船山古墳（御津船山古墳、以下船山古墳）との関係である。

船山古墳（図９）は全長約37m（後円部径21m・前方部最大幅約15m）の前方後円墳で、葺石が認められる（御津町1990）。発掘調査は実施されていないが、過去に円筒埴輪が採集されている。写真が掲載されている「須恵質の円筒埴輪片」（御津町1990）は、朝顔形埴輪の口

* 森泰通は江古山遺跡、古村積神社古墳等、２分割の製作工程が淡輪系埴輪に広く共通する技法であることを指摘する（森2013）。同様の技法は伊勢地域の西ノ野16号墳、保子里14号墳、西高山３号墳等においても確認される。この技法は円筒中位までを成形して上位の成形を休止し、積み上げた粘土の上端を半乾燥させるために製作途中の製品を一時的に移動させる作業を伴っていたとも考えられる。とすれば、回転台からの離脱を容易とするため（辻川2007）とされる「淡輪技法」とも相俟ってより一層の作業の効率化が促されたと考えられる。同様の製作痕跡を石堂野Ｂ遺跡に認めることは難しく、江古山遺跡、古村積神社古墳等、この技法がMT15型式期に三河地域に広く普及したとする理解によるなら、石堂野Ｂ遺跡の円筒埴輪は（製作技法の点において）、MT15型式期よりやや古相に位置付けられる可能性もある。

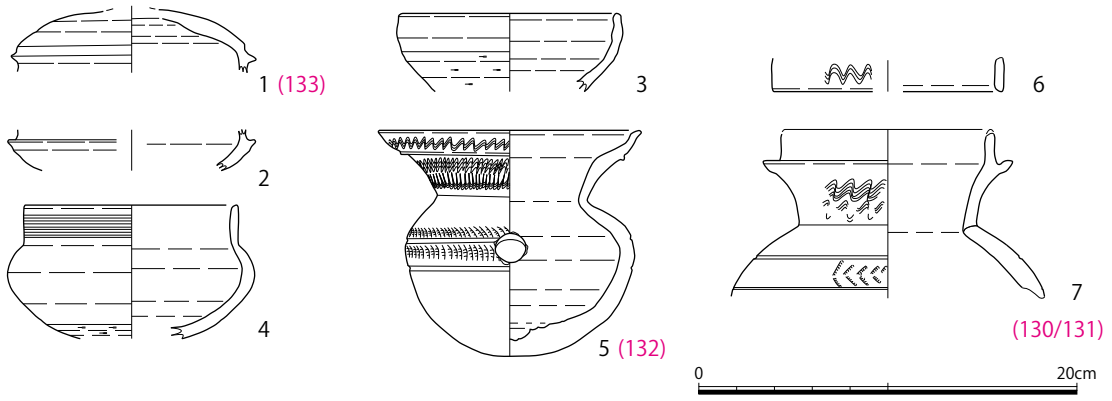
縁部と思われ、外面には粗いタテハケが施されている。その他、無黒斑で、外面に１次調整としてタテハケ、２次調整としてＣ種ヨコハケを施した円筒埴輪が知られ、「尾張型埴輪の可能性が高い」とされている（鈴木 1993）。なお、赤塚次郎も船山古墳の埴輪を「尾張型埴輪」に含めている（赤塚 1991）。

さて今回、古墳の踏査によって、数十点の埴輪を採集した（図 10）。埴輪はいずれも無黒斑、窖窯焼成であるが、青灰色、硬質に還元焔焼成された（「須恵質の」）破片は認められない。これらは、黄褐色を基調とする石堂野Ｂ遺跡２類円筒埴輪に類似する１点を除いて、赤褐色を基調とする石堂野Ｂ遺跡１類円筒埴輪に類似する（後述）。前者はハケが観察されず、後者は総じてハケが粗い点も共通する。特に注目される点は、底部に「淡輪技法」が認められる点、形象埴輪を含む点である。

１～12・14 は円筒埴輪、13 は朝顔形埴輪である。１は内面のヨコハケから、口縁部付近

表２　須恵器一覧表

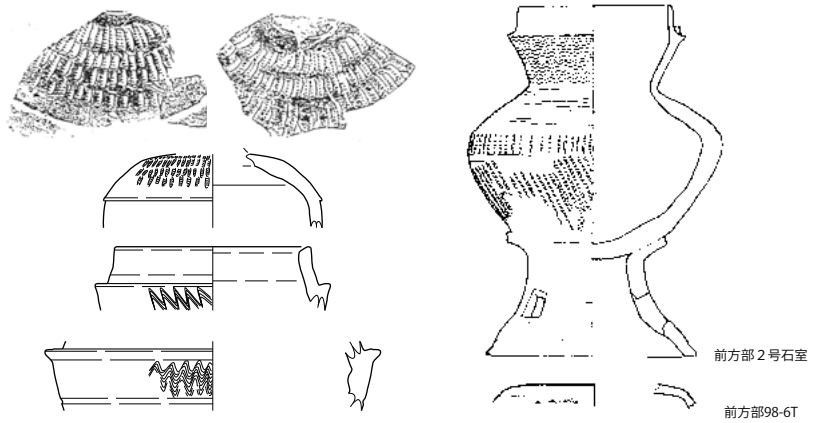
番号	器種	グリッド	遺構	計測値(cm) 口径	器高	既報告 登録番号	備考
1	須恵器 蓋杯（有蓋高杯） 蓋	IIIG12t	SX801		-3.2	E-133	器形を修正
2	須恵器 蓋杯 杯	IIIG12t	SX801		-2.2		
3	須恵器 高杯（鉢）	IIIG14s	SD801	11.8	-4.2		
4	須恵器 短頸壷	IIIG12t	SX801	11.2	-7.1		図上で接合
5	須恵器 甕	IIIG12t	SX801	13.8	11.9	E-132	文様を追加
6	須恵器 有蓋壷 蓋	IIIG14s	SD801		-1.8		
7	須恵器 有蓋壷	IIIG14s	SD801	11.3	8.7	E-130/131	図上で復原、文様を追加



—豊川流域の有蓋壷の諸例—

水神古窯灰原の文様がある蓋は、大阪府馬塚古墳の蓋の摘みに動物装飾が付される装飾台付有蓋壷の蓋等の類例（愛知県陶磁資料館 1995）から、（台付）有蓋壷の蓋と推定される。

三ツ山古墳前方部の２号石室出土の有蓋壷は器台状の台を付す（または器台が釉着した）特徴的な有蓋壷である。また、有蓋壷の蓋（と推定される破片）が前方部の 98-6T で出土している。



水神古窯灰原　　三ツ山古墳

図８　石堂野Ｂ遺跡 SX801・SD801 出土須恵器と有蓋壷の諸例（1:4）

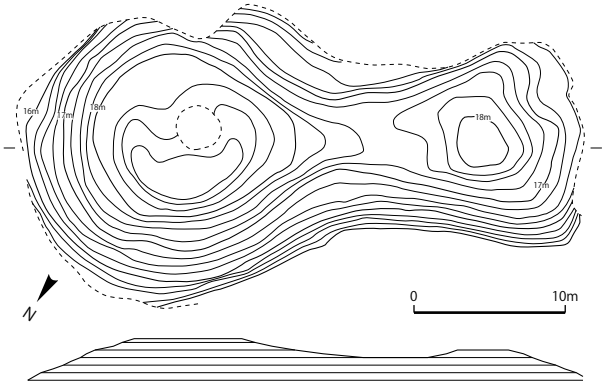


図９　船山古墳墳丘測量図（1:500）

に相当すると思われる。２～４は外面に２次調整のＣ種ヨコハケ、４は円形の透孔が認められる。５～８は突帯を含む部位で、突帯の突出比は石堂野Ｂ遺跡１類とほぼ同じである。５は上段にヨコハケ、６・７は下段にタテハケがある。６は突帯下端のヨコナデが省略される。９・10の外面は１次調整のタテハケが観察されるのみである。11・12・15は底部で、12・15は「淡輪技法」が明確に認められ、11は下端を欠損するが、同技法による可能性が高い。15はやや内傾する器形から形象埴輪の基部と考えられる。また、鋭利な段が特徴的である*。

13は朝顔形埴輪の壷部分に相当する。14は胎土と色調、器壁の厚さ、外面調整、著しく低平な突帯が石堂野Ｂ遺跡２類円筒埴輪に類似する。

16～23は形象埴輪の可能性が高いと思われるものの、器種、部位を特定することは難しい。16～19は線刻、圧痕、刺突等が認められる部分で、16は家形埴輪または器財埴輪であろう。20は鈍角に折れ曲がる部分、21・22は平板な部分の破片である。

23は外面から内面に器壁を斜めに貫く焼成前の小穿孔が認められることから、石見型埴輪の可能性がある。破片は円筒形で、外面調整はタテハケのみ（無文）であることから、石見型埴輪とすれば小型で円筒形の軸部の左右に鰭飾りを付した無文の奈良県岩室池古墳（天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1985）等の例が想起される。石見型埴輪はTK47型式期の水神古窯（豊橋市教育委員会 1987）に認められる。同古窯の石見型埴輪は形象部を突帯によって区画するが、文様と小穿孔はない。また、三河地域においては、TK23型式期からTK47型式期の西山古墳（西尾市教育委員会 1986）で、底部に板状工具による押圧がある円筒埴輪に伴って石見型埴輪が出土している（後述）。

以上、石堂野Ｂ遺跡に近在する前方後円墳の船山古墳に淡輪系埴輪が用いられていたことを明らかとした。両者の埴輪には赤褐色を基調とする色調、粗いハケ調整、低平な突帯等、相互に類似する特徴も多く、同一の生産窯から供給された可能性も推測される。後段においては、周辺地域を含めた淡輪系埴輪の採用状況と埴輪の供給関係を整理してまとめとしたい。

6. 埴輪の採用状況と供給関係

（１）淡輪系埴輪の採用状況

石堂野Ｂ遺跡の小古墳における淡輪系埴輪の採用は、前方後円墳である船山古墳との関係を無視することは難しい。翻って、埴輪の特徴の類似から船山古墳の築造時期は石堂野Ｂ遺跡の小古墳と相前後する時期、TK47型式期からMT15型式期と推測することも可能であろう。

そして、円筒埴輪と形象埴輪を採用する前方後円墳の船山古墳、円筒埴輪のみを採用する小古墳（SD805・SX816、SD807）、埴輪を採用しない小古墳（SD801・SX801）がほぼ同時期に築造されていた状況も明らかとなった。特徴的なのは相互における立地上の関係で、前方後円墳が低地に、小古墳がそれを臨む舌状の台地上に築造されている点である。

さて、東三河地域においては、念仏塚５号墳（赤木 1994、鈴木 1997）、数谷原古墳（鈴木・白井 1998）が淡輪系埴輪を採用し、埴輪には形象埴輪が豊富に含まれるが、両者は早くに滅失し、古墳の墳形や規模を知ることができない。一方、西三河地域の矢作川下流域においては、36～37ｍの前方後円墳である青塚古墳が淡輪系埴輪を採用し、埴輪には形象埴輪も含まれる（赤塚 1997）。青塚古墳は船山古墳と同様、周辺に丘陵が点在するにもかかわらず低地に立地し、墳形や規模も類似する点は示唆的である。

* 鈴木敏則は底部の段が「丸いもの」は「ふじ蔓などの蔓や枝の可能性が高」く、「角張っているもの」は「ヒノキなど針葉樹材の割材をリング状にした可能性もある」として、両者は「時期差となる可能性が高い」とする（鈴木 2003）。

周辺の（小）古墳に淡輪系埴輪が採用された状況は明らかではないが、豊川下流域との一定の類似を認めることは可能であろう。

小古墳における淡輪系埴輪の採用（図 11）は矢作川上流域の江古山遺跡（豊田市教育委員会 2013）が典型である。江古山遺跡においては舌状台地上に辺 10m 前後の方墳 3 基が検出され、SZ03 と SZ04 の 2 基が淡輪系埴輪を採用し、SZ02 は埴輪を採用しない。前者の 2 基は周溝から出土した須恵器から東山 10 号窯式期とされ、後者は時期が明確な出土遺物には乏しいが、それにやや先行する時期が想定されている。舌状台地上に小古墳が複数築造される状況、10m 前後の小古墳に淡輪系埴輪が採用され、埴輪には形象埴輪を含まない点、さらに埴輪を採用しない小古墳が混在する状況は石堂野 B 遺跡によく類似する。

伊勢地域では、中ノ川流域の西高山古墳群（鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会 1983）、寺谷古墳群（鈴鹿市考古博物館 2013）、朝明川流域の城ノ広古墳群（三重県埋蔵文化財センター 2005）等の小古墳に淡輪系埴輪が採用され、埴輪を採用しない小古墳が混在する状況が認められる。また、埴輪の有無と古墳の規模は必ずしも相関しない。これらの状況は石堂野 B 遺跡の小古墳に類似するが、形象埴輪を伴う小古墳が少なくない点は三河地域の状況とは異なる。

鈴木一有は遠江地域において淡輪系埴輪（遠江 II 類）を採用する古墳は（帆立貝形を含む）前方後円墳に限定され、小古墳には採用されない傾向が顕著であることを示し、「明確な階層差」が反映されていることを述べている（鈴木 2012）。また、淡輪系埴輪を採用する古墳は葺石を用いない点についても共通性が高いとする。

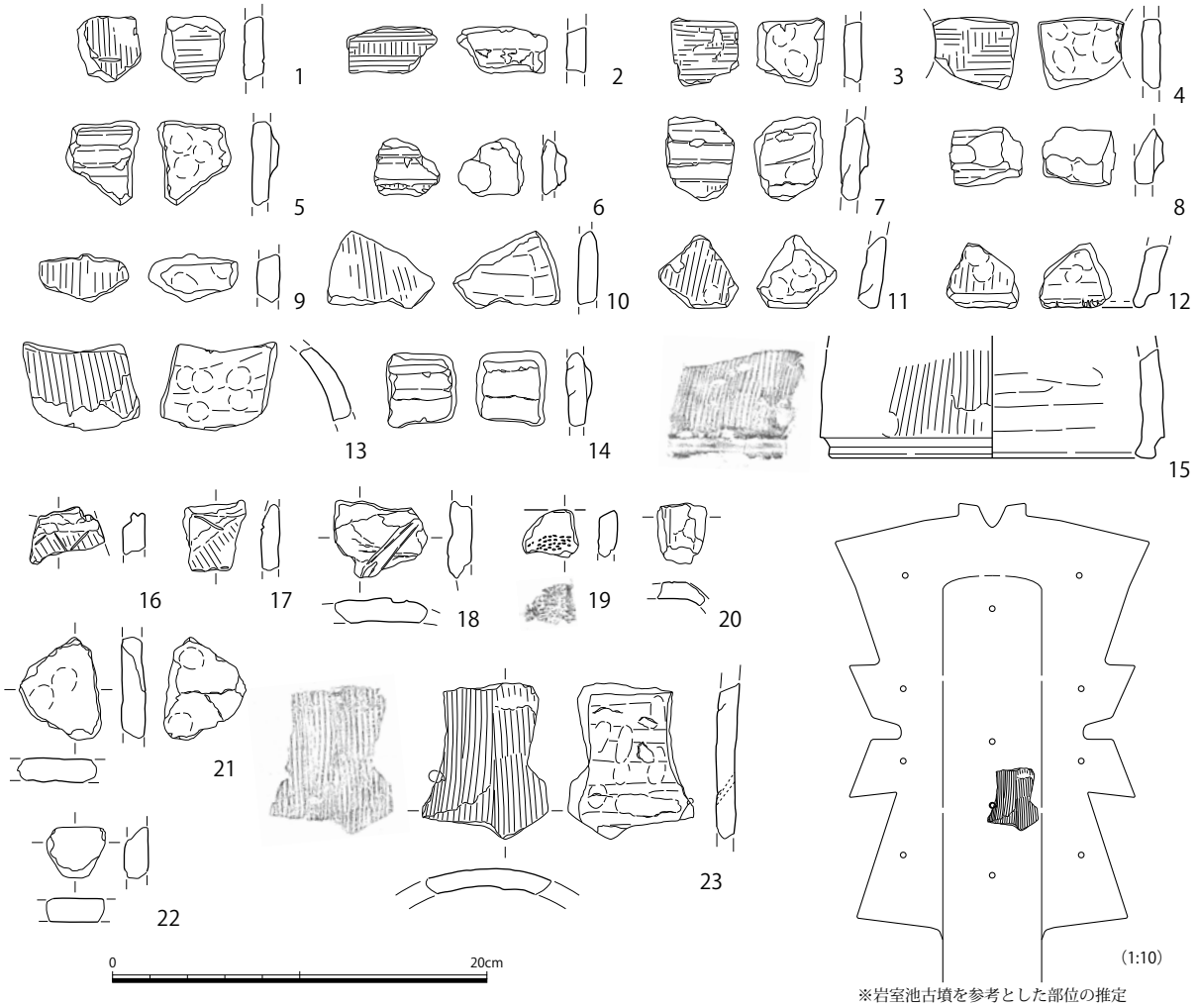


図 10　船山古墳採集埴輪（1:4）

以上から、製作技法を共有する埴輪を採用しながらもその状況は、淡輪系の形象埴輪と円筒埴輪を採用する小古墳、埴輪を採用しない小古墳が混在する伊勢地域、淡輪系円筒埴輪を採用する小古墳と埴輪を採用しない小古墳が混在し、形象埴輪は前方後円墳に採用される三河地域、形象埴輪を含む淡輪系埴輪の採用が前方後円墳に限定される遠江地域のそれぞれで異なっていたことが理解される。今後は各地域固有の状況を精査し、異なる状況が生成する背景についても議論を深める必要がある。

（2）須恵器系埴輪の供給関係

石堂野Ｂ遺跡の小古墳と前方後円墳の船山古墳には淡輪系埴輪が同一の生産窯から供給された可能性が高いことが推察された。このとき問題となるのが、反対側の尾根を隔てた丘陵斜面に立地する赤根天王山古墳に対する「尾張型埴輪」の供給である。

赤根天王山古墳は全長 35m 程度の前方後円墳とされ、畑の開墾時に円筒埴輪と形象埴輪が採集されている（鈴木 1993）。埴輪は青灰色、須恵質に焼成された破片が含まれる。円筒埴輪は外面の２次調整としてＣ種ヨコハケを施す須恵器系埴輪で、タタキを施していること、底部にケズリ調整を施していることから、「尾張型埴輪」とされることが多い。人物埴輪についても、鈴木徹によって尾張系の製作技法が用いられていることが指摘されている（鈴木 2000）。赤根天王山古墳は時期の推定が可能な須恵器の出土はないが、埴輪にタタキが施されていることから、MT15 型式期と推定され（鈴木 1993）、（タタキが認められない）船山古墳や石堂野Ｂ遺跡に対してやや後出する可能性が高い。また、国府１号墳も外面の２次調整としてＣ種ヨコハケを施した「尾張型埴輪」と形象埴輪として人物埴輪が供給されている（豊川市教育委員会 1965、鈴木 1989）。古墳に伴う須恵器は MT15 型式期から TK10 型式期に対応する。つまり、豊川下流域右岸の古墳に供給される埴輪は、TK47 型式期から MT15 型式期の淡輪系埴輪から、MT15 型式期から TK10 型式期に「尾張型埴輪」に変化したらしいことが確かめられる。

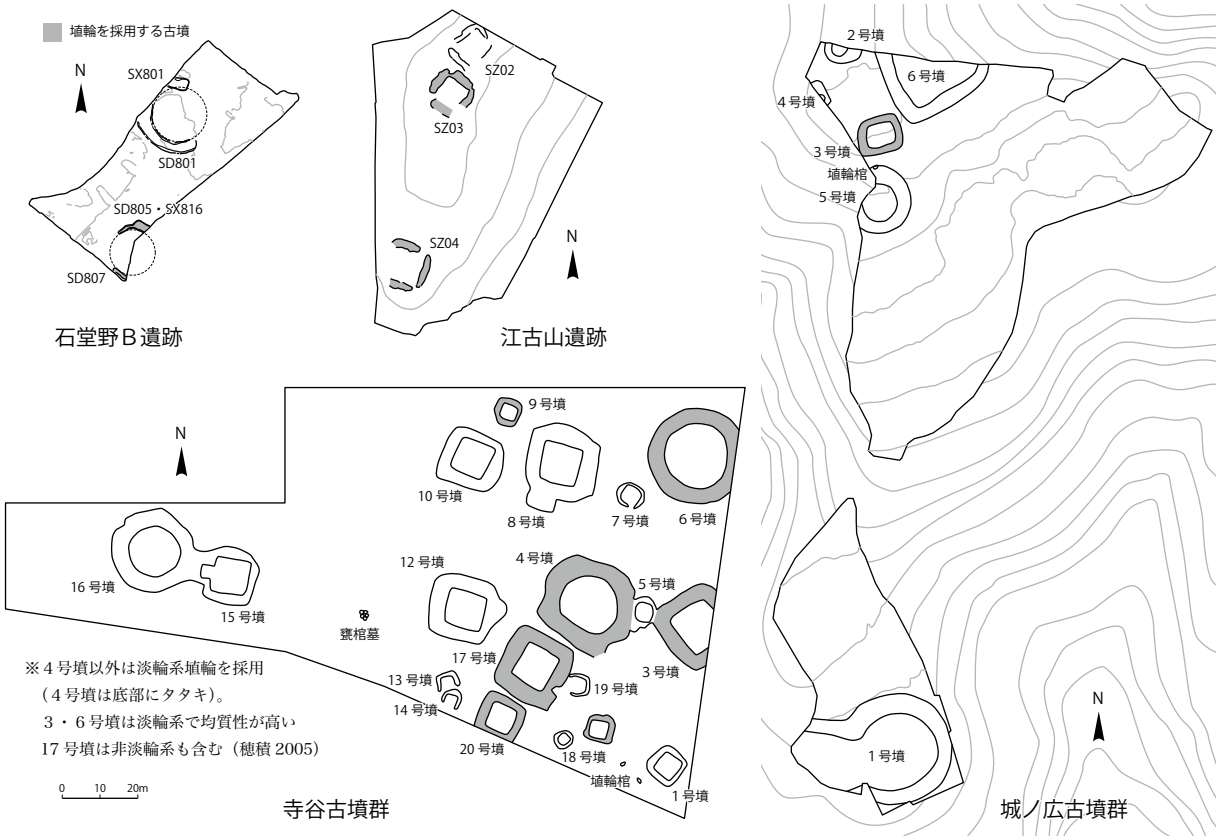


図 11　淡輪系埴輪を採用する古墳群（1:2,000）

7. おわりに

以上を通じて、石堂野Ｂ遺跡の径約 12m の小円墳（または辺 11m の小方墳）に淡輪系円筒埴輪が用いられていたことを明確にした。併せて近隣の船山古墳にも淡輪系埴輪が採用されていたことも示し、前方後円墳の築造を契機として周辺の小古墳に同様の埴輪が使用される状況までを見通した。今回は資料の再提示を第一義としたため、東三河地域における生産窯を含めた埴輪の生産・流通状況との対比、いわゆる初期群集墳としての評価等、論じ残した問題も多い。向後に期したい。

付．西山古墳の石見型埴輪

西山古墳の石見型埴輪は、「楯形」の器財埴輪として報告されている埴輪（西尾市教育委員会 1986）で、「石見型」として触れられることはあるものの（豊橋市教育委員会 1987、鈴木 1993、三田 2005）、詳細に論じられたことはない。今回、船山古墳採集の石見型埴輪と推測した小穿孔がある埴輪を検討するに際して、西山古墳の石見型埴輪を調査する機会に恵まれたので、ここにその詳細を付す（図 12）。なお、石見型埴輪各部位については、河内一浩の呼称（河内 1999）に従った。

１～４が石見型埴輪で、１（既報告第 14 図 73）・２（既報告同 74）は表面採集資料、３（既報告同 71）・４（既報告同 72）は発掘調査による出土資料である。１と２、３と４は同一個体の可能性が高く、前２点と後２点は、出土状況等からも別個体と考えられる。いずれも外面全面にやや細かいハケ調整を施し、直孤文に由来する波線を線刻する。内面はナデ調整を施す。

１が２と同一個体とすれば、形象部上段面の左右反対側の部位に相当することになる。小穿孔は縦 1.0cm、横 0.7cm の長方形で、斜め上方から焼成前に穿つが貫通しない。

２は上段面の側辺に相当し、下端には抉りがある。破断面には小穿孔が確認され、穿孔内には幅 0.5cm、厚さ 0.3cm の断面長方形の棒状鉄器が挿入されている。鉄器の現存長は 1.3cm である。鉄器と小孔は完全に密着していることから、焼成後の鉄器の挿入を想定することは困難なように思われる。

３・４は上段面の上辺で、上端に粘土紐を貼付けて加飾する。３は上段面の上辺から側辺の部位に相当する。小穿孔は縦 0.6cm、横 0.5cm の長方形で、斜め上方から焼成前に穿たれ貫通する。４は上辺中央の部位で角状に突出する。

２の上段面下端に抉りがある特徴は大阪府軽里４号墳（羽曳野市遺跡調査会 1992）、同東弓削遺跡（八尾市教育委員会 1976、河内 1999）の石見型埴輪に共通する。両者は上下の文様面を粘土板または粘土紐の貼付けによる段で区画するもので、型式的に先行する様相を示す。軽里４号墳の時期は TK47 型式期とされ、西山古墳が採集された須恵器（５～７）から TK23 型式期から TK47 型式期と考えられることと齟齬しない。

形象埴輪の小孔に鉄器が挿入された例としては、静岡県堂山古墳の形象埴輪（磐田市教育委員会 1995）と奈良県市尾今田２号墳の定型化前の石見型埴輪ともされる形象埴輪（高取町教育委員会 1983）が知られている。前者は TK73 型式期、後者は TK216 型式期に相当する。

堂山古墳は 12 点の形象埴輪に小孔が認められ、７点に鉄器が挿入されていた。ただ、小孔は 0.6 ～ 0.9cm の円形で器面に対して直角に穿たれ、多数の孔が穿たれることがない点は石見型埴輪と異なる。挿入される鉄器は幅 0.6 ～ 0.8cm、厚さ 0.15 ～ 0.3cm の断面長方形で、西山古墳の石見型埴輪の小孔に挿入された鉄器と類似する。奈良県市尾今田２号墳の形象埴輪に挿入された鉄器については、製作時に挿入された可能性が指摘されている。

西山古墳の石見型埴輪は、小孔に鉄器が挿入されている点も考慮すると、古相を呈すると考えられる（TK23 型式期から TK47 型式期）。それから程なくして、（TK47 型式期から MT15 型式期に）水神古窯や船山古墳の無文の石見型埴輪が製作されたのであろう。高橋克壽は石見型埴輪が「畿内で６世紀に入って突然の盛行を見せるようになった背景」に「東海地方からの影響を考慮する必要があろう」とする（高橋 1992）。少なくとも、西山古墳の石見型埴輪は石見型埴輪の系譜と地域的展開に有力な示唆を与えることは確かであろう。

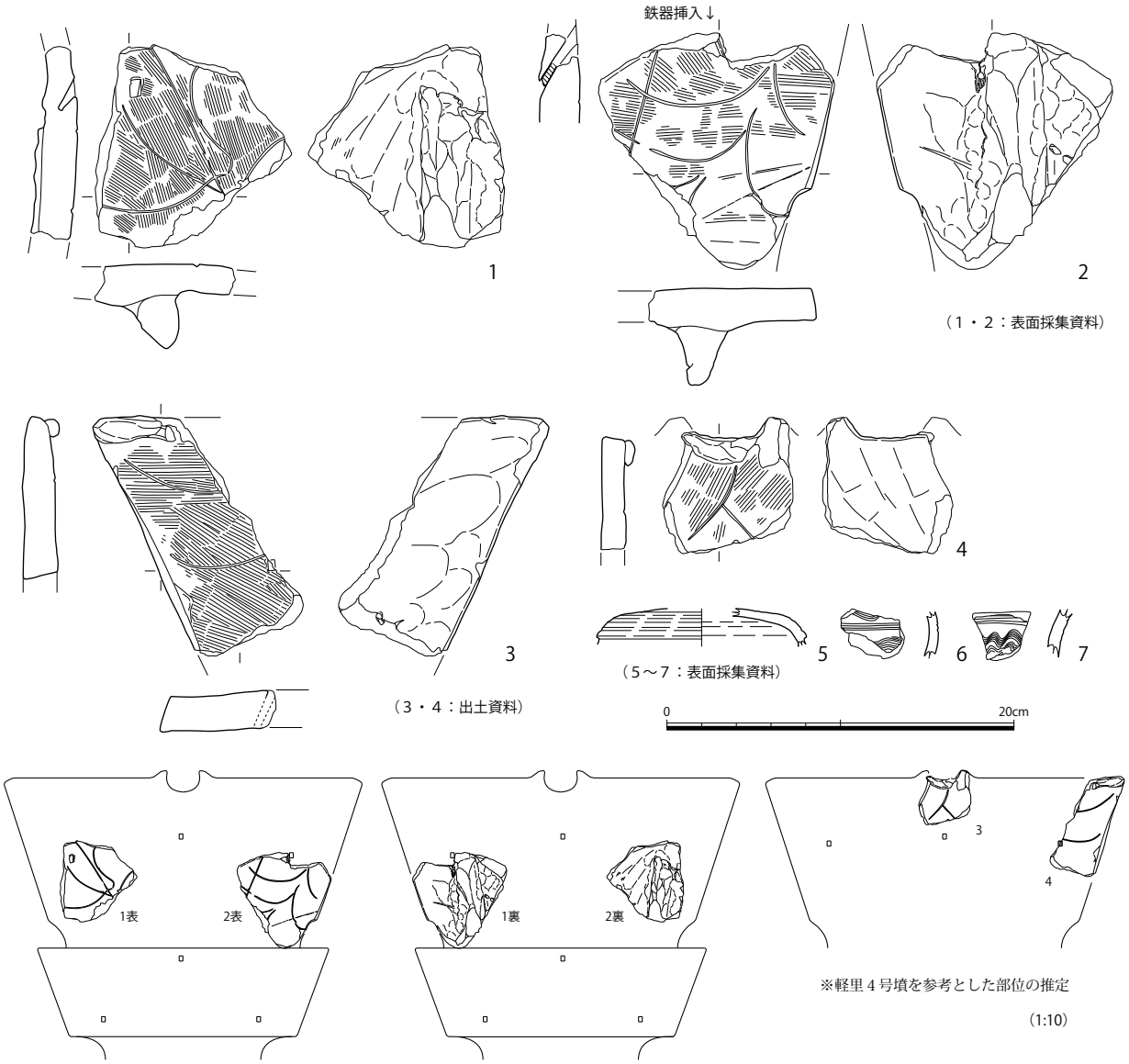
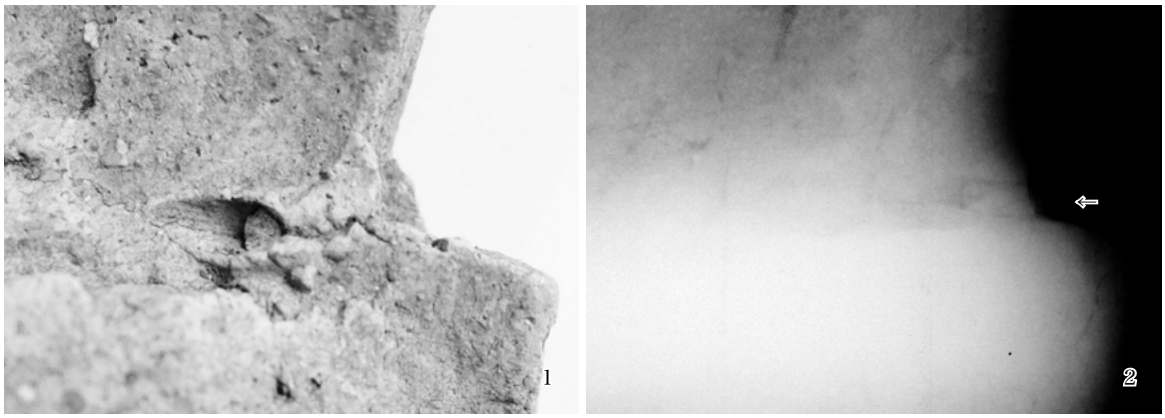


図 12　西山古墳の石見型埴輪（1: 4）



１：石見型埴輪の小孔に挿入された鉄器　　２：小孔付近のＸ線写真

写真　西山古墳の石見型埴輪の細部

小文作製の過程で以下の諸機関、諸氏のご協力、ご高配を賜った。末尾ながら記してお礼を申し上げる。

愛知県埋蔵文化財調査センター　鈴鹿市考古博物館　豊川市教育委員会　豊田市教育委員会
豊橋市文化財センター　西尾市教育委員会
西尾市立東部中学校
浅田博造　天野雄矢　岩原剛　大平知香
佐藤公保　鈴木敏則　鈴木とよ江　贄元洋
藤原秀樹　森泰通　吉田真由美

参考文献

愛知県陶磁資料館　1995 『装飾須恵器展』
愛知県埋蔵文化財センター　2003 『石堂野Ｂ遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 114 集
赤木 剛　1994 「念仏塚５号墳出土の埴輪」『三河考古』第７号　三河考古刊行会
赤塚次郎　1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集　愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎　1992 「東海」『古墳時代の研究９　古墳 III　埴輪』雄山閣
赤塚次郎　1997 「愛知県内前方後円（方）墳等の測量調査概要報告１」『愛知県史研究』創刊号　愛知県
磐田市教育委員会　1995 『遠江堂山古墳』
河内一浩　1999 「誉田白鳥埴輪窯出土の石見型盾形埴輪―古市古墳群出土の紹介も兼ねて―」『埴輪論叢』第１号　埴輪検討会
川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論『考古学雑誌』第 64 巻第２号　日本考古学会
三田敦司　2005 「西山古墳」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』愛知県
須川勝以　2005 「船山古墳」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』愛知県
鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会　1983 『郡山遺跡群発掘調査報告Ｉ　西高山Ｄ遺跡　西高山古墳群　西川遺跡』鈴鹿市文化財調査報告 VII
鈴鹿市考古博物館　2013 『特別展　伊勢湾をめぐる交流』
鈴木一有　2012 「三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義・郷ヶ平古墳群の形成過程とその特質」『郷ヶ平古墳群』浜松市文化振興財団
鈴木 徹　1997 「三河地域の形象埴輪（１）―念仏塚古墳群の埴輪―」『三河考古』第 10 号　三河考古刊行会
鈴木 徹　2000 「愛知県宝飯郡御津町赤根天王山古墳の形象埴輪―東三河地域における尾張系埴輪の採用―」『埴輪研究会誌』 第４号　埴輪研究会
鈴木 徹・白井秀明　1998 「三河地域の形象埴輪（２）―犬頭神社所蔵の埴輪―」『三河考古』第 11 号　三河考古刊行会
鈴木敏則　1989 「三河の埴輪（１）」『ホリデー考古』第８号　ホリデー考古刊行会
鈴木敏則　1993 「三河の埴輪（３）」『三河考古』第５号　三河考古刊行会
鈴木敏則　1994 「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第 46 巻第２号
鈴木敏則　2003 「淡輪系円筒埴輪 2003」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第 52 会埋蔵文化財研究集会実行委員会
高取町教育委員会　1983 『高取町市尾今田古墳群発掘調査概報』
高橋克壽　1992 「器財埴輪」『古墳時代の研究９　古墳 III　埴輪』雄山閣
辻川哲朗　2007 「埴輪生産からみた須恵器工人―「淡輪技法」の解釈と系譜をめぐって―」『考古学研究』第 54 巻第３号
天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所　1985 『岩室池古墳　平等坊・岩室遺跡』
豊川市教育委員会　1965 『豊川市古墳調査概報』
豊田市教育委員会　2013 『江古山遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 55 集
豊橋市教育委員会　1987 『水神古窯』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第７集
豊橋市教育委員会　1998 『水神古窯灰原』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 47 集
豊橋市教育委員会　2000 『平成 11 年度三ツ山古墳調査概要（II）』
西尾市教育委員会　1986 『西山古墳発掘調査報告書』
羽曳野市遺跡調査会　1992 『古市大溝（軽里４号墳）発掘調査概報』
穂積裕昌　2005 「伊勢における窖窯出現以降の埴輪生産～その系統と工人編成～」『考古学フォーラム』17　考古学フォーラム
三重県埋蔵文化財センター　2005 『城ノ広古墳群・城ノ広遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 257
御津町　1990 『御津町史』
森 泰通　2013 「豊田市内出土の淡輪系埴輪について」『江古山遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 55 集　豊田市教育委員会
八尾市教育委員会　1976 『東弓削遺跡』